「福音を伝える」ヒント集　　カトリック　徳山教会

2020 年 10 月　聖ヴィアンネから学ぶ

先月は「アンネの日記」から平和について考えました。今月は１８世紀の無学な聖ヴィアンネのお話です。難しい神学を語ったり、殉教したわけではないので、聖人の道をたどる身近な模範になります。**(参考資料『聖ヴィアンネの精神』　モンナン神父・著　久保守訳　聖母文庫　『ミサの前に読む聖人伝』　バリョヌエボ神父著　中央出版社)**

ヴィアンネは、日本なら江戸時代の後期にフランスのリヨン地方で生まれました。当時は、フランス革命の影響で、公にミサを立てることができず、神父は変装して信者の家でミサをしなければいけませんでした。ヴィアンネ少年も、そのようなミサに与りながら、13 歳の時に初聖体を受けました。そして「18 歳の時に神学校に入りたい」と父に打ち明けますが、酪農で生計を営む家族の大切な働き手だったので、家計のために一度は断念しました。けれども、20 歳になってやっと家族に認められて神学校に入ることができました。けれども、これまで全く教育を受けていなかったので、ヴィアンネはすぐに壁にぶつかります。特にラテン語の試験はいつも落第でした。「勉強のできないヴィアンネをどうしようか？」と司教も頭を痛めます。しかし、神学校での評判は大変良く、勉強以外では神学生の模範でした。そのため、最後の最後にお情けで 29 歳の時に司祭に叙階されます。派遣されたのは、教区で最も小さなアルスという田舎でした。

アルスの村は、小さいだけでなく、村人は信者でしたが不熱心でした。ヴィアンネは、41 年間、主任神父としてこの村に留まりました。自分のことを理解せず、意地悪ばかりする助任司祭と１０年近く一緒に暮らし続けました。**聖人の中で、何の苦労もなく、普通に暮らした人は、一人もいません**。ヴィアンネが優れていたのはゆるしの秘跡です。罪を感知して、たった一言で励まし、心の痛悔と慰めを人々に与えたので、たくさんの人が押し寄せました。けれども、彼にはその評判が何よりの苦痛でした。いつも自分は何のとりえもない司祭だと思っていて、三回も村から逃げ出して、誰も知らない修道院に姿を隠そうとしましたが、司教の命令でまたアルスに戻ってきました。以下は、本からの要約です。

無学な聖人

聖人たちは、生涯の最初から立派だった訳ではありません。しかし、最後の時には、皆立派でした。私たちの生涯の最初も良くはありませんでした。しかし、立派な者となって最後の時を迎えましょう。そうすれば、天国において聖人たちと共に永遠の幸福を味わうことができるでしょう。

聖ヴィアンネが本当の知恵を得たのは、難しい本からではなく、主の足元にひざまずき、その足元を涙で洗い、熱い接吻を重ねる祈りの中からでした。夜昼、たくさんの人が教えを求めて押しかける前に、聖櫃の前にひざまずき、そこで一切を学んでいました。

驚くべきことに、聖ヴィアンネは生まれつき知力の優れた人に強い魅力を持っていました。彼は、学問がないから大神学校に入れてもらえないだろうと思い、落第を繰り返しました。普通、自分の

苦手なことができる人への反発があるものです。しかし、彼にはそのような反発心はなく、純粋に知力ある人を尊敬しました。

労苦を考えてはいけません。報いを考えねばなりません。永遠に比べたら 20 年、30 年が何でしょう。ものの数ではありません。・・・苦しみにしても、どれだけあるでしょう。ほんの辱め、幾らかの損害、刺のある言葉、こんなもので殺されることはありません。人間はつまらないものであっても、神様のみ心にかなうことができるのは素晴らしいことです。

「私たちの舌はお祈りのためにだけ使わねばなりません。心は愛するためにだけに、眼は泣くためにだけ使わねばなりません。」

聖霊について

人間それ自体は、何ものでもありません。しかし、聖霊と共にいれば大変なことができます。人間は、地上的な者で、動物的です。その人間の霊魂を育て、高めることができるのは聖霊以外にありません。聖人たちが、この世のものから離脱できたのは、聖霊に導かれるままに生きたからです。聖霊に導かれる者は、学者よりも深遠なことを語ります。神様によって勇気と知恵が導かれる時、人間は誤ることがありません。

聖霊は、ものを拡大するルーペのように、善と悪を大きく拡大して見せてくださいます。神様のためにした小さな行為の偉大さが見えます。同時に、小さな過ちの大きさも見えるのです。聖霊の光によって、神様との小さな齟齬が大きく見えるでしょう。小さな罪にも恐怖を抱かせるでしょう。ですから、聖マリアは決して罪を犯されませんでした。聖霊は、聖母に悪の醜さを悟らせていたのです。聖母は、ごく小さな過ちでも、身の毛をよだつほど怖れていました。
聖霊を宿している者は、自分を頼みにできません。自分の哀れさと惨めさを知っているのです。高慢な人は、聖霊を全然宿していません。たとえ宿しても、束の間だけです。

聖霊がなければ、私たちは道端の石ころのようなものです。・・・水をいっぱいに吸った海綿を一方の手に、もう一方の手に石ころを持ってみてください。そして 2 つとも押しつぶしてみなさい。石ころからは何も出ませんが、海綿からはドット水が出てくるでしょう。海綿は、聖霊に満たされた霊魂です。そして小石は、聖霊の宿っていない冷たい頑なな心です。

聖霊がいなければ、冷淡になります。ですから、熱心さが冷めるのを感じたときは、早く聖霊に 9 日間のお祈りをして、信仰と愛とを願わなければなりません。

聖霊が殉教者たちを力づけました。聖霊がなかったら、殉教者たちは木の葉のようにガタガタと崩れたでしょう。殉教者たちが乗せられた死刑台の薪の火がつけられた時、この火の激しい熱を、聖

霊は神様の愛で鎮めたのです。

もし聖霊がなければ、イエスの死も無駄でした。イエスが定めた秘跡も救霊になりませんでした。聖霊降臨によって、慰め主が私たちに来ます。
「神様、私に聖霊を遣わしてください。そして、私のありのままを、またあなたを知るようにしてください」（聖アウグスティノ）

謙遜について
謙遜な人は、自分の意見を尋ねられたらごく大人しく自分の意見を述べます。その後は、他人の意見を聞きます。自分に理があり、他の人が間違っていても、何も言いません。
聖アロイジオ・ゴンザガは、間違った時に間違ったことを素直に認め、正しかった時には「何度も私は間違ったことがあります」と言っていました。聖人たちは、世間のことに対しては淡白でしたが、神様の事柄に関しては細心の注意を払い、こだわりました。

聖体訪問
私たちの主は、聖体の秘跡の中に身を隠し、私たちが訪問し、お願いするのを待っていらっしゃいます。主は、私たちの自主性、弱さに順応してくださるのです。

聖体訪問する私たちに主はこう語り掛けます。「あなたに私が見えない。けれどもそれは何でもないことだ。望むものは何でも願いなさい。私は与えましょう。」　主は、私たちを励まし慰めるために、聖体の秘跡の中におられ、罪人のために絶えず御父に嘆願し、取り次いでくださいます。だから、私たちもしばしば聖体訪問をしなければなりません。仕事の合間を見て、あるいは、何か無駄なことをやめて。ちょっとの時間でも、聖体のもとに行ってお祈りし、主が十字架で受けた侮辱をお慰めしましょう。主は、どれほど喜ばれることでしょう。いそいそとやってくる潔い霊魂をご覧になると、主はにっこりと微笑まれます。

聖櫃の前で、ただ一人、主の御許にいる時、どんな幸福を感じるでしょう。主は、あなたの心根をご覧になられて必要な助けを与えてくださいます。主は、手にいっぱいの聖なる恵みを持って、分ち与える人を探しておられます。

私がアルスに来た最初の頃です。ある人が教会の前を通る時、決まって教会の中に入っていきました。朝は仕事に行く時、晩は仕事から帰る時、扉のところにスコップとつるはしを置いて、長い時間、聖体の秘跡の前にとどまって礼拝して行きました。ある日、私はその人に聞きました。「何を私たちの主に申し上げているのですか？」と。すると、「神父様、何も申しません。私は、主を見つめ、主は私を見つめておられます」　何と美しいことでしょう。
（ヴィアンネ神父は感涙しながら話した）

聖人たちは、ただ神様を見、神様のためにだけ働くために、自分を忘れました。神様だけを見出すために、一切の被造物を忘れました。このようにして、天の国に行き着くのです。

振り返りの質問

Q. ヴィアンネが、聖人になっていったのは、知識ではありませんでした。あなたは、何を大切にして聖人に近づいているでしょうか？（祈り、奉仕、謙遜さ、聖霊を頼みとすること・・・）

Q. ヴィアンネは、自分の足りないところ（勉強）を認め、人の良いところ（知力）を認めました。同じようにできるでしょうか？

Q. ヴィアンネが語っていることの中から心に留まったことは何でしょうか？　それをどのように育んでいけるでしょうか